

+ 4 3 【どっちもどっちも】

いまはどうなのかわかりませんが、当時のぼくたちは、先生にあだなをつけるというと、だいたいおばけの名前をつけたものでした。

【うみぼうず】とか【ひょうすえ】とか【いったんもめん】とか【ばけねこ】とか【ゆきおんな】とか。

隣のお姉さん、つまり山本不二子さんからきいたことがあります、中学校の先生のあだなも、おばけがおおくて、なかでも変わっていたのが、【どっちもどっちも】とあだなをつけられていた先生だったとのことです。

その先生は保健体育を教える高齢の女性教諭でしたが、お姉さんにいわせると、

「ふつうに見てもおばけの顔」

「逆立ちして見てもおばけの顔」

だそうです。

それで【どっちもどっちも】とあだながついたそうです。

わざわざ逆立ちして見るなんて妙な話ですが、体育の授業のなかでその姿勢で見た同級生がいたそうです。

ところがその同級生は、

「逆立ちしてみたら、女の先生でのうて、男の先生じゃった」

といていたとのことでした。

(おかまじゃ、おかまじゃ)

とおもったらしいですが、先生の秘密は生徒の秘密。

ここはやっぱり、懐爺でしょう、お姉さん。

というわけで、

「そんなことあるんかのう」

懐爺にきいてみました。

「そんなことあるんか、とおもわせるのが、おばけのすばらしいところで、【どっちもどっちも】はおばけのなかでも、じつに洒落た貴重品です」

「ひん、かい」

「貴重人ともいえないし、貴重怪人ですかねえ。すみません、品は品が

ない、いいかたでしたね」

「わかればいいんじゃない。たしかにおばけはどうかぞえるんか、わからんのう。ひとりふたり、じゃのうて、いっぴきにひき、じゃのうて、いっとうにとう、じゃのうて、ひとおばけふたおばけかのう。ええい、めんどうくさいのう」

「いちばけ、にばけは、どうでしょう」

懐爺が提案しました。

「ばけいち、ばけにが、ええのう」

ぼくがひっくりかえしました。

「まあ、どっちもどっちも、ということですかねえ」

懐爺とぼくは、顔を見合わせて笑いました。

「おちがついたのう。だば【どっちもどっちも】のはなしは、これでおしまいだええ」

ぼくは帰ろうとしました。

めずらしく懐爺によびとめられました。

「金ちゃん、せっかくきたんですから、もうすこしおはなししませんかね」

「せっかく、かい。まいにちきてても、せっかくかい」

「はい。ところで金ちゃん、恐怖と畏怖のちがいて、わかりますか」

「わからいでか。きょうふは、きょう、きょうだけこわいことじゃ。あしたは、こわくない。いふは、いのふがひっくりかえるくらい、こわいことじゃ」

「ううむ。うまい、うますぎます」

「あたりかのう」

「当たりです。恐怖と畏怖は、それほどちがう怖さなのですが、大昔からおばけは、人間に恐怖を与えるものとおもわれてきました。でもわたしはおばけの本当の恐ろしさは畏怖にある。畏怖を与えないおばけは、じつはおばけの三下やっこでしてね。その【どっちもどっちも】はまちがいなく畏怖を与えますね。隣のお姉さんはどうっていましたか」

「やさしいせんせい、だといっとった」

「それだけですか」

「おとこかおんなか、どっちかわからん、というのはおそろしい、いうとった」

「それだけですか」

「おとこのせいとのきもちも、おんなのせいとのきもちも、りょうほうわかるせんせいで、そういうこともおそろしかった、いうとったのう」

「それですよ。【どっちもどっちも】の怖さは、【どっちもどっちも】がえらいおばけだという証拠です」

「えらいこっちゃのう。さんしたじゃのうて、さんうえかい」

「三上も上、雲の上ですよ」

それから懐爺は、【どっちもどっちも】と、若いころ友達だったことを白状しました。